

■ 編集後記 ■

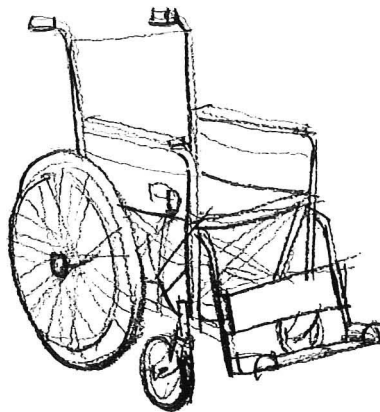
新春を寿ぐとともに、未だお屠蘇気分の醒めやらぬ日に新年1月号をお届けします。

年頭に当たり、本誌が『理学療法ジャーナル』と銘打って新生し、1周年を迎えることができましたことを、まず編集子として、読者諸氏ともどもにお慶びしたいと思います。

本誌特集として、脳卒中と廃用症候群を企画するに当たって思ったことは、ことばとして廃用症候群はよく使われるようになったが、その臨床病態や実態は未だ未知の部分があるし、またよく理解されていないのではないかということでした。

理学療法においても病態の正常化、パターン改善に終始しており、生活者としての自立や社会参加に必要な体力増進、心理・社会性の正常化、強化の面においては、欧米の理学療法士の対応と比較して未だ未熟であるし、遅れているのではないかと危惧しています。

池田論文では、廃用症候群の総論として、その基本概念を明らかにしていただき、急性期のみでなく、回復期、維持期のそれぞれにおける対応の重要性が強調されています。そして身体面だけでなく、必理・社会面においても廃用症候群を考慮すべきだとされている。また、新しい知見として、小腸粘膜の萎縮、低運動による肥満、口腔機能の低下を挙げています。



前田論文は、歩行可能者でも非麻痺肢の萎縮がある事実から、早期リハビリテーションだけでなく、回復期、維持期リハビリテーションの訓練の在りかたについて言及しています。

間嶋論文は、循環機能障害について、評価法、片麻痺患者の循環機能障害の実態と要因について論じており、今後の検討課題となるものと述べています。

福屋論文は、退院後の維持的リハビリテーションを生活指導について実践例を含めて述べています。生活指導の中での理学療法士の役割にもふれており、参考になると思います。

今回から新しく入門講座が始まり、第1回として新人理学療法士のために、理学療法プログラムの立てかたを取り上げましたが、参考になれば幸いです。

最後に、本年が皆様にとって良いお年であることを祈ります。(松村 秩)

理学療法ジャーナル

(第24巻 第1号)

1990年1月15日発行(毎月1回15日発行)

1部定価 1,391円(本体1,350円)

(配送料61円)

年ぎめ予約購読料 15,960円
(本体15,495円)
(送料弊社負担)

発行 株式会社 医学書院

代表者 金原 優

〒113-91 東京都文京区本郷5-24-3

電話 社内案内(03)817-5600

本誌編集室直通(03)817-5703

(担当:渡邊・細田)

販売部直通(03)817-5659・5660

広告室直通(03)817-5696

ファクシミリ(03)815-7802

振替口座 東京7-96693番

印刷所 三報社印刷(株) 電話(03)637-0005

広告申込所 (株)医薬広告 電話(03)814-1971

Published by IGAKU-SHOIN Ltd. 5-24-3 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo © 1990, Printed in Japan

本誌の内容を無断で複写・複製・転載すると、著作権・出版権の侵害となることがありますので御注意ください。

● 編集顧問 ●

天 児 民 和
九州労災病院名誉院長

五 味 重 春
東京都立医療技術短期大学
学長

津 山 直 一
国立身体障害者リハビリテ
ーションセンター総長

横 山 巖
七沢リハビリテーション
病院脳血管センター院長
(五十音順、以下同じ)

● 編集委員 ●

安 藤 徳 彦
神奈川県リハビリテーション
病院

上 田 敏
東京大学リハビリテ
ーション部

鶴 見 隆 正
高知医科大学附属病院

奈 良 勲
金沢大学医療技術短期大学部

福 屋 靖 子
筑波大学

松 村 秩
東京都立医療技術短期大学

吉 尾 雅 春
協和会病院

● 編集同人 ●

伊 藤 日出男

今 川 忠 男

宇都宮 初 夫

大喜多 潤

大 田 近 雄

大 峯 三 郎

金 子 誠 喜

菊 地 延 子

木 山 喬 博

工 藤 俊 輔

佐々木 伸 一

高 田 京 子

高 橋 正 明

田 口 順 子

武 富 由 雄

寺 山 久美子

富 岡 詔 子

橋 元 隆

半 田 健 壽

藤 沢 しげ子

前 田 哲 男

牧 田 光 代

松 沢 博

丸 山 仁 司

宮 本 省 三

矢 谷 令 子

山 下 隆 昭

米 田 睦 男